

源氏物語

須磨

紫式部

青空文庫

人恋ふる涙をわすれ大海へ引かれ行く

べき身かと思ひぬ

(晶子)

当帝の外戚の大臣一派が極端な圧迫をして源氏に不愉快な目を見せることが多くなつて行く。つとめて冷静にはしていても、このままで置けば今以上な禍わざわいが起こつて来るかもしれぬと源氏は思うようになった。源氏が隠栖いんせいの地に擬している須磨すまという所は、昔は相当に家などもあつたが、近ごろはさびれて人口も稀薄きはくになり、漁夫の住んでいる数もわずかであると源氏は聞いていたが、田舎いなかといつても人の多い所で、引き締まりのない隠栖になつてしまつてはいやであるし、そうかといつて、京にあまり遠くては、人には言えぬことではあるが夫人のことが気がかりでならぬであらうしと、煩悶はんもんした結果須磨へ行こうと決心した。この際は源氏の心に上つてくる過去も未来も皆悲しかった。いとわしく思つた都も、いよいよ遠くへ離れて行こうとする時になつては、捨て去りがたい気のするものが多いことを源氏は感じていた。その中でも若い夫人が、近づく別れを日々に悲しんでいる様子の哀れさは何にもまさつていたましかつた。この人とはどんなことがあつても再

会を遂げようという覚悟はあつても、考えてみれば、一日二日の外泊をしていても恋しさに堪えられなかつたし、女王によおうもその間は同じように心細がつていたそんな間柄であるから、幾年と期間の定まった別居でもなし、無常の人世では、仮の別れが永久の別れになるやも計られないのであると、源氏は悲しくて、そつといつしよに伴つて行こうという気持ちになることもあるのであるが、そうした寂しい須磨のような所に、海岸へ波の寄つてくるほかは、人の来訪することもない住居すまいに、この華麗な貴女きじよと同棲どうせいしていることは、あまりに不似合いなことではあるし、自身としても妻のいたましさに苦しまねばならぬであろうと源氏は思つて、それはやめることにしたのを、夫人は、

「どんなひどい所だつて、ごいつしよでさえあれば私はいい」

と言つて、行きたい希望のこぼまれるのを恨めしく思つていた。

はなちるさと

花散里の君も、源氏の通つて来ることは少なくとも、一家の生活は全部源氏の保護があつてできているのであるから、この変動の前に心をいためているのはもつともなことと言わねばならない。源氏の心にたいした愛があつたのではなくても、とにかく情人として時々通つて来ていた所々では、人知れず心をいためている女も多数にあつた。入道の宮からも、またこんなことで自身の立場を不利に導く取り沙汰が作られるかもしれぬという遠

慮を世間へあそばしながらの御慰問が始終源氏にあった。昔の日にこの熱情が見せていただけのことであつたならと源氏は思つて、この方のために始終物思いをせねばならぬ運命が恨めしかつた。三月の二十幾日に京を立つことにしたのである。世間へは何とも発表せず、きわめて親密に思っている家司^{けいし}七、八人だけを供にして、簡単な人数で出かけることにしていた。恋人たちの所へは手紙だけを送つて、ひそかに別れを告げた。形式的なものでなくて、真情のこもつたもので、いつまでも自分を忘れさすまいとした手紙を書いたのであつたから、きつと文学的におもしろいものもあつたに違いないが、その時分に筆者はこのいたましい出来事に頭を混乱させていて、それらのことを注意して聞いておかなかつたのが残念である。

出発前二、三日のことである、源氏はそつと左大臣家へ行つた。簡単な網代車^{あじろぐるま}で、女の乗っているようにして奥のほうへ寄つてゐることなども、近侍者には悲しい夢のようばかり思われた。昔使つていた住居^{すまい}のほうは源氏の目に寂しく荒れているような気がした。若君の乳母^{めのと}たちとか、昔の夫人の侍女で今も残っている人たちとかが、源氏の来たのを珍しがって集まつて来た。今日の不幸な源氏を見て、人生の認識のまだ十分でない若い女房なども皆泣く。かわいい顔をした若君がふぎけながら走つて来た。

「長く見ないでいても父を忘れないのだね」

と言つて、膝ひざの上へ子をすわらせながらも源氏は悲しんでいた。左大臣がこちらへ来て源氏に逢あつた。

「おひまな間に伺つて、なんでもない昔の話ですがお目にかかつてしたくてなりませんでしたものの、病氣のために御奉公もしないで、官庁へ出ずのんきにいて、私人としては暢のんき氣に人の交際もすると言われるようでは、それももうどうでもいいのですが、今の社会はそんなことでもなんらかの危害が加えられますから恐こわかったのでございます。あなたの御失脚を拝見して、私は長生きをしているから、こんな情けない世の中も見るので悲しいのでございます。末世です。天地をさかさまにしてもありうることでない現象でございます。何もかも私はいやになつてしまいました」

としおれながら言う大臣であつた。

「何事も皆前生の報いなのでしようから、根本的にいえば自分の罪なのです。私のように官位を剥奪はくだつされるほどのことでなくても、勅ちよつ勘かんの者は普通人と同じように生活していることはよろしくないとされるのはこの国ばかりのことでもありません。私などの遠くへ追放するという条項もあるので、このまま京におりましてはなおなんらかの処

罰を受けることと思われます。冤罪^{えんざい}であるという自信を持って京に留まっていますことも朝廷へ済まない気がしますし、今以上の厳罰にあわない先に、自分から遠隔の地へ移ったほうがいいと思ったのです」

などと、こまごま源氏は語っていた。大臣は昔の話をして、院がどれだけ源氏を愛しておいになったかと、その例を引いて、涙をおさえる直衣^{のうし}の袖^{そで}を顔から離すことができないのである。源氏も泣いていた。若君が無心に祖父と父の間を歩いて、二人に甘えることを楽しんでるのに心が打たれるふうである。

「亡^なくなりました娘のことを、私は少しも忘れることができずに悲しんでおりましたが、今度の事によりまして、もしあれが生きておりましたなら、どんなに歎^{なげ}くことであろうと、短命で死んで、この悪夢を見ずに済んだことではじめて慰めたのでございます。小さい方が老祖母の中に残っておいでになって、りっぱな父君に接近されることのない月日の長かろうと思われまことが私には何よりも最も悲しゅうございます。昔の時代には真実罪を犯した者も、これほどの扱いは受けなかったものです。宿命だと見るほかはありません。外国の朝廷にもずいぶんありますように冤罪にお当たりになったのでございます。しかし、それにしてもなんとか言い出す者があって、世間が騒ぎ出して、処罰はそれからのもので

すが、どうも訳がわかりません」

大臣はいろいろな意見を述べた。三位中將さんみも来て、酒が出たりなどして夜がふけたので源氏は泊まることにした。女房たちをその座敷に集めて話し合うのであったが、源氏の隠れた恋人である中納言の君が、人には言えない悲しみを一人でしている様子を源氏は哀れに思えてならないのである。皆が寝たあとに源氏は中納言を慰めてやろうとした。源氏の泊まった理由はそこにあつたのである。翌朝は暗い間に源氏は帰ろうとした。明け方の月が美しく、いろいろな春の花の木が皆盛りを失って、少しの花が若葉の蔭かげに咲き残った庭に、淡く霧がかかって、花を包んだ霞かすみがぼうとその中を白くしている美は、秋の夜の美よりも身にしむことが深い。隅すみの欄干によりかかって、しばらく源氏は庭をながめていた。中納言の君は見送ろうとして妻戸をあけてすわっていた。

「あなたとまた再会ができるかどうか。むずかしい気のすることだ。こんな運命になることを知らないで、逢えば逢うことのできたころにのんきでいたのが残念だ」

と源氏は言うのであったが、女は何も言わずに泣いているばかりである。

若君の乳母めのとの宰相の君が使いになつて、大臣夫人の宮の御挨拶あいさつを伝えた。

「お目にかかつてお話も伺いたかつたのですが、悲しみが先だちまして、どうしようもご

がいませんでしたうちに、もうこんなに早くお出かけになるそうです。そうならしないで
はならないことになっておりますことも何という悲しいことでございましょう。哀れな人
が眠りからさめますまでお待ちになりませんか」

聞いていて源氏は、泣きながら、

鳥部山燃えし煙もまがふやと海人の塩焼く浦見にぞ行く

これをお返事の詞ことばともなく言っていた。

「夜明けにする別れはみなこんなに悲しいものだろうか。あなた方は経験を持っていらっ
しやるでしょう」

「どんな時にも別れは悲しゆうございますが、今朝けさの悲しゆうございますことは何にも比
較ができると思えません」

宰相の君の声は鼻声になっていて、言葉どおり深く悲しんでいるふうであつた。

「ぜひお話ししたく存じますこともあるのでございしますが、さてそれも申し上げられませ
んで煩悶はんもんをしております心をお察してください。ただ今よく眠っております人に今朝また

逢つてまいることは、私の旅の思い立ちを躊躇ちゆうちよさせることになるでございましょうから、冷酷であるでしょうがこのままいます」

と源氏は宮へ御挨拶あいさつを返したのである。帰つて行く源氏の姿を女房たちは皆のぞいていた。落ちようとする月が一段明るくなつた光の中を、清艶せいえんな容姿で、物思いをしながら出て行く源氏を見ては、虎も狼も泣とらおかみかずにはいられないであろう。ましてこの人たちは源氏の少年時代から侍していたのであるから、言いようもなくこの別れを悲しく思つたのである。源氏の歌に対して宮のお返しになつた歌は、

亡なき人の別れやいとど隔たらん煙となりし雲井ならでは

というのである。今の悲しみに以前の死別の日の涙も添つて流れる人たちばかりで、左大臣家は女のむせび泣きの声に満たされた。

源氏が二条の院へ帰つて見ると、ここでも女房は宵よいからずっと歎なげき明かしたふうで、所々にかたまつて世の成り行きを悲しんでいた。家職の詰め所を見ると、親しい侍臣は源氏について行くはずで、その用意と、家族たちとの別れを惜しむために各自が家のほうへ行

つていてだれもない。家職以外の者も始終集まつて来ていたものであるが、訪ねて来ることは官辺の目が恐ろしくてだれもできないのである。これまで門前に多かつた馬や車はもとより影もないのである。人生とはこんなに寂しいものであつたのだと源氏は思った。食堂の大食卓なども使用する人数が少なくて、半分ほどは塵を積もらせていた。畳は所々裏向けにしてあつた。自分がいるうちにすでにこうである、まして去つてしまつたあとの家はどんなに荒涼たるものになるだろうと源氏は思った。西の対へ行くと、格子を宵のままおろさせないで、物思いをする夫人が夜通し起きていたあとであつたから、縁側の所々に寝ていた童女などが、この時刻にやつと皆起き出して、夜の姿のままで往来するのも趣のあることであつたが、気の弱くなつてゐる源氏はこんな時にも、何年かの留守の間にはこうした人たちも散り散りにほかへ移つて行つてしまふだろうと、そんなはずのないことまでも想像されて心細くなるのであつた。源氏は夫人に、左大臣家を別れに訪ねて、夜がふけて一泊したことを言つた。

「それをあなたはほかの事に疑つて、くやしがつていませんでしたか。もうわずかしかない私の京の時間だけは、せめてあなたといつしよにいたいと私は望んでいるのだけれど、いよいよ遠くへ行くことになる、ここにもかしこにも行つておかねばならない家が多い

のですよ。人間はだれがいつ死ぬかもしれませんから、恨めしいなどと思わせたままになつては悪いと思うのですよ」

「あなたのことがこうなつた以外のくやしいことなどは私にない」

とだけ言っている夫人の様子にも、他のだれよりも深い悲しみの見えるのを、源氏もつともであると思つた。父の親王は初めからこの女王^{によおう}に、手もとで育てておいでになる姫君ほどの深い愛を持つておいでにならなかつたし、また現在では皇太后派をはばかつて、よそよそしい態度をおとりになり、源氏の不幸も見舞いにおいでにならないのを、夫人は人聞きも恥ずかしいことであると思つて、存在を知られないままにいたほうがかえつてよかったとも悔やんでいた。継母である宮の夫人が、ある人に、

「あの人が突然幸福な女になつて出現したかと思うと、すぐにもうその夢は消えてしまふじやないか。お母^{かあ}さん、お祖母^{ばあ}さん、今度は良人^{おとこ}という順にだれにも短い縁よりない人らしい」

と言つた言葉を、宮のお邸^{やしき}の事情をよく知っている人があつて話したので、女王は情けなく恨めしく思つて、こちらからも音信をしない絶交状態であつて、そのほかにはだれ一人たよりになる人を持たない孤独の女王であつた。

「私がいつまでも現状に置かれるのだったら、どんなひどい侘^わび住居^{ずまい}であつてもあなたを迎えます。今それを実行することは人間きが穏やかでないから、私は遠慮してしなだけです。勅勘の人というものは、明るい日月の下へ出ることも許されていませんからね。のんきになつていては罪を重ねることになるのです。私は犯した罪のないことは自信しているが、前生の因縁か何かでこんなことにされているのだから、まして愛妻といつしよに配所へ行つたりすることは例のないことだから、常識では考えることもできないようなことをする政府にまた私を迫害する口実を与えるようなものですからね」

などと源氏は語つていた。昼に近いころまで源氏は寢室にいたが、そのうちに帥^{そつ}の宮がおいでになり、三位中将も来邸した。面会をするために源氏は着がえをするのであつたが、「私は無位の人間だから」

と言つて、無地の直衣^{のうし}にした。それでかえつて艶^{えん}な姿になつたようである。鬢^{びん}を搔^かくために鏡台に向かつた源氏は、瘦^やせの見える顔が我ながらきれいに思われた。

「ずいぶん衰えたものだ。こんなに痩せているのが哀れですね」

と源氏が言うと、女王は目に涙を浮かべて鏡のほうを見た。源氏の心は悲しみに暗くなるばかりである。

身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡のかげははなれじ

と源氏が言うと、

別れても影だにとまるものならば鏡を見てもなぐさめてまし

言うともなくこう言いながら、柱に隠されるようにして涙を紛らしている若紫の優雅な美は、なおだれよりもすぐれた恋人であると源氏にも認めさせた。親王と三位中将は身にしむ話をして夕方帰った。

はなちるさと

花散里が心細がつて、今度のことが決まって以来始終手紙をよこすのも、源氏にはもつともなことと思われて、あの人ももう一度逢いに行つてやらねば恨めしく思うであろうという気がして、今夜もまたそこへ行くために家を出るのを、源氏は自身ながらも物足らず寂しく思われて、気が進まなかったために、ずっとふけてから来たのを、

「ここまでも別れにお歩きになる所の一つにしてお寄りくださいましたとは」

こんなことを言つて喜んだ女御(にようし)のことなどは少し省略して置く。この心細い女兄弟は源氏の同情によつてわずかに生活の体面を保つてゐるのであるから、今後はどうなつて行くかというような不安が、寂しい家の中に漂つてゐるやうに源氏は見た。おぼろな月がさしてきて、広い池のあたり、木の多い築山(つきやま)のあたりが寂しく見渡された時、まして須磨の浦は寂しいであらうと源氏は思つた。西座敷にいる姫君は、出発の前二日になつてはもう源氏の来訪は受けられないものと思つて、氣をめいらせていたのであつたが、しめやかな月の光の中を、源氏がこちらへ歩いて来たのを知つて、静かに膝行(いざ)つて出た。そしてそのまま二人は並んで月をながめながら語つてゐるうちに明け方近い時になつた。

「夜が短いのですね。ただこんなふうにだけでもいつしよにいられることがもうないかもしれせんね。私たちがまだこんないやな世の中の渦中(かちゆう)に巻き込まれないでいられたころを、なぜむだにばかりしたのでしょう。過去にも未来にも例の少ないやうな不幸な男になるのを知らないで、あなたといつしよにいてよい時間をなぜこれまでにたくさん作らなかつたのだろう」

恋の初めから今日までのことを源氏が言い出して、感傷的な話の尽きないのであるが、鶏ももうたびたび鳴いた。源氏はやはり世間をはばかりて、ここからも早晩に出て行かね

ばならないのである。月がすつとはいってしまふ時のような気がして女心は悲しかった。月の光がちようど花散里はなちるさとの袖の上にさしているのである。「宿る月さへ濡ぬるる顔なる」という歌のようであつた。

月影の宿れる袖は狭くともめてぞ見ばや飽かぬ光をそで

こう言つて、花散里の悲しがつている様子があまりに哀れで、源氏のほうから慰めてやらねばならなかつた。

「行きめぐりつひにすむべき月影のしばし曇らん空なながめそ

はかないことだ。私は希望を持つているのだが、反対に涙が流れてきて心を暗くされますよ」

と源氏は言つて、夜明け前の一時的に暗くなるころに歸つて行つた。

源氏はいよいよ旅の用意にかかつた。源氏に誠意を持つて仕えて、現在の権勢に媚こびる

ことを思わない人たちを選んで、家司けいしとして留守中るすの事務を扱う者をまず上から下まで定めた。随行するのは特にまたその中から選ばれた至誠の士である。隠栖いんせいの用に持つて行くのは日々必要な物だけで、それも飾りけのない質素な物を選んだ。それから書籍類、詩集などを入れた箱、そのほかには琴を一つだけ携えて行くことにした。たくさんにある手道具や華奢かしやな工芸品は少しも持つて行かない。一平民の質素な隠栖者になろうとするのである。源氏は今まで召し使つていた男女をはじめ、家のこと全部を西の対へ任せることにした。私領の莊園、牧場、そのほか所有権のあるものの証券も皆夫人の手もとへ置いて行くのであった。なおそのほかに物資の蓄蔵されてある幾つの倉庫、納おさめ殿どのなどのことも信用する少納言の乳母めのとを上にして何人かの家司をそれにつけて、夫人の物としてある財産の管理上の事務を取らせることに計らつたのである。

これまで東の対の女房として源氏に直接使われていた中の、中なかつ務かき、中将などという源氏の愛人らは、源氏の冷淡さに恨めしいところはあつても、接近して暮らすことに幸福を認めて満足していた人たちで、今後は何を楽しみに女房勤めができようと思つたのであるが、

「長生きができてまた京へ帰るかもしれない私の所にいたいと思う人は西の対で勤めてい

るがいい」

と源氏は言つて、上から下まですべての女房を西の対へ来させた。そして女の生活に必要な絹布類を豊富に分けて与えた。左大臣家にいる若君の乳母たちへも、また花散里へもそのことをした。華美な物もあつたが、何年間に必要な実用的な物も多くそろえて贈つたのである。源氏はまた途中の人目を気づかないながらないしのかみ尚侍の所へも別れの手紙を送つた。

あなたから何とも言つてくだらないのも道理なようには思いますが、いよいよ京を去る時になつてみますと、悲しいと思われることも、恨めしさも強く感ぜられます。

あふせ
逢瀬なき涙の川に沈みしや流るるみをの初めなりけん

こんなに人への執着が強くては仏様に救われる望みもありません。

間で盗み見されることがあやぶまれて細かには書けなかつたのである。手紙を読んだ尚侍は非常に悲しがった。流れて出る涙はとめどもなかつた。

涙川浮ぶ水沫も消えぬべし別れてのちの瀬をもまたずて

泣き泣き乱れ心で書いた、乱れ書きの字の美しいのを見ても、源氏の心は多く惹かれて、この人と最後の会見をしないで自分に行かれるであろうかとも思ったが、いろいろなことが源氏を反省させた。恋しい人の一族が源氏の排斥を企てたのであることを思つて、またその人の立場の苦しさも推し量つて、手紙を送る以上のことはしなかった。

出立の前夜に源氏は院のお墓へ謁するために北山へ向かった。明け方にかけて月の出るころであつたから、それまでの時間に源氏は入道の宮へお暇乞いに伺候した。お居間の御簾の前に源氏の座が設けられて、宮御自身でお話になるのであつた。宮は東宮のことを限りもなく不安に思召す御様子である。聡明な男女が熱を内に包んで別れの言葉をかわしたのであるが、それには洗練された悲哀というようなものがあつた。昔に少しも變わつておいでにならないなつかしい美しい感じの受け取れる源氏は、過去の十数年にわたる思慕に対して、冷たい理智の一面よりお見せにならなかつた恨みも言つてみたい氣になるのであつたが、今は尼であつて、いつそう道義的になつておいでになる方にうとましいと思われまいとも考え、自分ながらもその口火を切つてしまえば、どこまで頭が混乱して

しまうかわからない恐れもあつて心をおさえた。

「こういたしました意外な罪に問われますことになりました、私は良心に思い合わされることが一つございまして空恐ろしく存じます。私はどうなりまして東宮が御無事に即位あそばせば私は満足いたします」

とだけ言つた。それは真実の告白であつた。宮も皆わかつておいでになることであつたから源氏のこの言葉で大きな衝動をお受けになつただけで、何ともお返辞はあそばさなかつた。初恋人への怨恨^{えんこん}、父性愛、別離の悲しみが一つになつて泣く源氏の姿はあくまでも優雅であつた。

「これから御陵へ参りますが、お言^{こと}つてがございませんか」

と源氏は言つたが、宮のお返辞はしばらくなかつた。躊躇^{ちゆうちよ}をしておいになる御様子である。

見しは無く有るは悲しき世のはてを背^{そむ}きしかひもなくなくぞ経^ふる

宮はお悲しみの実感が余つて、歌としては完全なものがおできにならなかつた。

別れしに悲しきことは尽きにしをまたもこの世の憂^うさは勝^{まさ}れる

これは源氏の作である。やつと月が出たので、三条の宮を源氏は出て御陵へ行こうとした。供はただ五、六人つれただけである。下の侍も親しい者ばかりにして馬で行った。今さらなことではあるが以前の源氏の外出に比べてなんという寂しい一行であろう。家従たちも皆悲しんでいたが、その中に昔の齋院の御禊^{みそぎ}の日に大将の仮の隨身になって従って出た蔵人^{くらうど}を兼ねた右近衛将曹^{うこんえしやうそう}は、当然今年は上がるはずの位階も進められず、蔵人所の出仕は止められ、官を奪われてしまったので、これも進んで須磨へ行く一人になっているのであるが、この男が下加茂^{しもがも}の社^{やしろ}がはるかに見渡される所へ来ると、ふと昔が目^めに浮かんで来て、馬から飛びおりとすぐに源氏の馬の口を取って歌った。

ひきつれて葵^{あひひ}かざせしそのかみを思へばつらし加茂のみづがき

どんなにこの男の心は悲しいであろう、その時代にはだれよりもすぐれてはなやかな青

年であつたのだから、と思うと源氏は苦しかった。自身もまた馬からおりて加茂の社やしろを遥ようは、
拝いはしてお暇いとまご乞こいを神にした。

うき世をば今ぞ離るる留とどまらん名をばただすの神に任せて

と歌う源氏の優美さに文学的なこの青年は感激していた。

父帝の御陵に来て立つた源氏は、昔が今になつたように思われて、御在世中のことが目の前に見える気がするのであつたが、しかし尊い君王も過去の方になつておしまいになつては、最愛の御子の前へも姿をお出しになることができないのは悲しいことである。いろいろのことを源氏は泣く泣く訴えたが、何のお答えも承ることができない。自分のためにあそばされた数々の御遺言はどこへ皆失われたものであらうと、そんなことがまたここで悲しまれる源氏であつた。御墓のある所は高い雑草がはえていて、分けてはいる人は露に全身が潤うのである。この時は月もちようど雲の中へ隠れていて、前方の森が暗く続いているためにきわまりもなくものすごい。もうこのまま帰らないでもいいような気がして、一心に源氏が拝んでいる時に、昔のままのお姿が幻に見えた。それは寒けがするほどはつ

きりと見えた幻であつた。

亡^なき影やいかで見らんよそへつつ眺^{なが}むる月も雲隠れぬる

もう朝になるころ源氏は二条の院へ歸つた。源氏は東宮へもお暇^{あひさつ}乞ひの御挨拶をした。
中宮は王命^{おうみよつぶ}婦を御自身の代わりに宮のおそばへつけておありになるので、その部屋のほうへ手紙を持たせてやつたのである。

いよいよ今日京を立ちます。もう一度伺つて宮に拝顔を得ませぬことが、何の悲しみよりも大きい悲しみに私は思われます。何事も胸中を御推察くださつて、よろしきように宮へ申し上げてください。

いつかまた春の都の花を見ん時うしなへる山がつにして

この手紙は、桜の花の大部分は散つた枝へつけてあつた。命婦は源氏の今日の出立を申し上げて、この手紙を東宮にお目かけると、御幼年ではあるがまじめになつて読んでお

いになった。

「お返事はどう書きましたらよろしゅうございましょう」

「しばらく逢わないでも私は恋しいのであるから、遠くへ行ってしまったら、どんなに苦しくなるだろうと思うとお書き」

と宮は仰せられる。なんという御幼稚さだろうと思つて命婦はいたましく宮をながめていた。苦しい恋に夢中になつていた昔の源氏、そのある日の場合、ある夜の場合を命婦は思い出して、その恋愛がなかったならお二人にあの長い苦労はさせないでよかつたのであらうと思うと、自身に責任があるように思われて苦しかった。返事は、

何とも申しようがございません。宮様へは申し上げました。お心細そうな御様子を拝見いたします私も非常に悲しゅうございます。

と書いたあとは、悲しみに取り乱してよくわからぬ所があつた。

咲きてとく散るは憂^{うれ}けれど行く春は花の都を立ちかへり見よ

また御運の開けることがきつとございましょう。

とも書いて出したが、そのあとでも他の女房たちといっしょに悲しい話をし続けて、東宮の御殿は忍び泣きの声に満ちていた。一日でも源氏を見た者は皆不幸な旅に立つことを悲しんで惜しまぬ人もないのである。まして常に源氏の出入りしていた所では、源氏のほうへは知られていない長女^{わさめ}、御厠^{みかわやうど}人などの下級の女房までも源氏の慈愛を受けていて、たとえ短い期間で悪夢は終わるとしても、その間は源氏を見ることのできないのを歎^{なげ}いていた。世間もだれ一人今度の当局者の処置を至当と認める者はないのであった。七歳から夜も昼も父帝のおそばにいて、源氏の言葉はことごとく通り、源氏の推薦はむだになることもなかった。官吏はだれも源氏の恩をこうむらないものはないのである。源氏に対して感謝の念のない者はないのである。大官の中にも弁官の中にもそんな人は多かった。それ以下は無数である。皆が皆恩を忘れているのではないが、報復に手段を選ばない恐ろしい政府をはばかって、現在の源氏に好意を表示しに来る人はないのである。社会全体が源氏を惜しみ、陰では政府をそしる者、恨む者はあつても、自己を犠牲にしてまで、源氏に同情しても、それが源氏のために何ほどのことにもならぬと思うのであろうが、恨んだりすることは紳士らしくないことであると思ひながらも、源氏の心にはつい恨めしくなる人たちもさすがに多くて、人生はいやなものであると何につけても思われた。

当日は終日夫人と語り合っていて、そのころの例のとおりに早暁に源氏は出かけて行くのであった。狩衣^{かりぎぬ}などを着て、簡単な旅装をしていた。

「月が出てきたようだ。もう少し端のほうへ出て来て、見送ってだけでもください。あなたに話すことがたくさん積もったと毎日毎日思わなければならぬでしょうよ。一日二日ほかにいても話がたまり過ぎる苦しい私なのだ」

と言つて、御簾^{みす}を巻き上げて、縁側に近く女王^{によう}を誘うと、泣き沈んでいた夫人はためらいながら膝行^{いざ}つて出た。月の光のさすところに非常に美しく女王はすわっていた。自分が旅中に死んでしまえばこの人はどんなふうになるであろうと思うと、源氏は残して行くのが気がかりになつて悲しかったが、そんなことを思い出せば、いつそうこの人を悲しませることになると思つて、

「生ける世の別れを知らで契りつつ命を人に限りけるかな

はかないことだつた」

とだけ言つた。悲痛な心の底は見せまいとしているのであった。

惜しからぬ命に代へて目の前の別れをしばしとどめてしがな

と夫人は言う。それが真実の心の叫びであろうと思うと、立って行けない源氏であつたが、夜が明けてから家を出るのは見苦しいと思つて別れて行つた。

道すがら夫人の面影が目に見えて、源氏は胸を悲しみにふさがらせたまま船に乗つた。日の長いころであつたし、追い風でもあつて午後四時ごろに源氏の一行は須磨に着いた。旅をしたことのない源氏には、心細さもおもしろさも皆はじめの経験であつた。大江殿という所は荒廢していて松だけが昔の名残なごりのものらしく立つていた。

唐からくに国に名を残しける人よりもゆくへ知られぬ家居いへゐをやせん

と源氏は口ずさまれた。なごり渚へ寄る波がすぐにまた帰る波になるのをながめて、「いとどしく過ぎ行く方の恋しきにうらやましくも帰る波かな」これも源氏の口に上つた。だれも知つた業平朝臣なりひらあそんの古歌であるが、感傷的になつてゐる人々はこの歌に心を打たれてゐた。

来たほうを見ると山々が遠く霞かすんでいて、三千里外の旅を歌って、櫓かいらの雫しずくに泣いた詩の境地にいる氣もした。

ふる里を峯かすみの霞は隔なつれど眺ながむる空は同じ雲井か

総てのものが寂しく悲しく見られた。隠いんせい栖しの場所は行ゆき平ひらが「藻塩もしほた垂れつつ侘わぶと答へよ」と歌って住んでいた所に近くて、海岸からはややはいったあたりで、きわめて寂しい山の中である。めぐらせた垣根かきねも見馴みなれぬ珍しい物に源氏は思った。茅葺かやぶきの家であつて、それに葦あし葺きの廊にあたるような建物が続けられた風流な住居すまいになっていた。都会の家とは全然変わったこの趣も、ただの旅にとどまる家であつたならきつとおもしろく思われるに違いないと平生の趣味から源氏は思つてながめていた。ここに近い領地の預かり人などを呼び出して、いろいろな仕事を命じたり、良清朝臣よしきよあそんなどが家職の下役しかせぬことにも奔走するのも哀れであつた。きわめて短時日のうちにその家もおもしろい上品な山荘になった。水の流れを深くさせたり、木を植えさせたりして落ち着いてみればみるほど夢の氣がした。摂津守せつつのかみも以前から源氏に隸属していた男であつたから、公然ではないが

好意を寄せていた。そんなことで、準配所であるべき家も人出入りは多いのであるが、はかばかしい話し相手はなくて外国にでもいるように源氏は思われるのであった。こうしたつれづれな生活に何年も辛抱しんぼうすることができるようであらうかと源氏はみずから危あやぶんだ。旅住居ずまいがようやく整った形式を備えるようになったころは、もう五月雨さみだれの季節になっていて、源氏は京の事がしきりに思い出された。恋しい人が多かった。歎なげきに沈んでいた夫人、東宮のこと、無心に元氣よく遊んでいた若君、そんなことばかりを思つて悲しんでいた。源氏は京へ使いを出すことにした。二条の院へと入道の宮へとの手紙は容易に書けなかった。宮へは、

松島にあまの苦屋とまやもいかならん須磨の浦人しほたる頃ころ

いつもそうでございますが、ことに五月雨にはいりましてからは、悲しいことも、昔の恋しいこともひときわ深く、ひときわ自分の世界が暗くなつた気がいたされます。というのであった。尚ないしのかみ侍の所へは、例のように中納言の君への私信のようにして、その中へ入れたのには、

流人^{るにん}のつれづれさに昔の追想されることが多くなればなるほど、お逢いしたくてならぬ
い気ばかりがされます。

こりずまの浦のみるめのゆかしきを塩焼くあまやいかが思はん

と書いた。なお言葉は多かった。左大臣へも書き、若君の乳母^{めのと}の宰相の君へも育児に
いての注意を源氏は書いて送った。

京では須磨の使いのもたらした手紙によって思い乱れる人が多かった。二条の院の女^{によお}
王は起き上がることもできないほどの衝撃を受けたのである。焦^{こが}れて泣く女王を女房た
ちはなだめかねて心細い思いをしていた。源氏の使っていた手道具、常に弾^ひいていた楽器、
脱いで行つた衣服の香などから受ける感じは、夫人にとっては人の死んだ跡^{そとず}のようにはげ
しいものらしかった。夫人のこの状態がまた苦勞で、少納言は北山の僧都^{そうず}に祈^{きと}禱^{とう}の
頼んだ。北山では哀れな肉親の夫人のためと、源氏のために修^{しゆ}法^{ほう}をした。夫人の歎^{なげ}きの
心が静まっていくことと、幸福な日がまた二人の上に帰ってくることを仏に祈つたのであ
る。二条の院では夏の夜着類も作つて須磨へ送ることにした。無位無官の人の用^{かとり}いる縑^{かとり}の

絹の直衣、指貫さしぬきの仕立てられていくのを見ても、かつて思いも寄らなかつた悲哀を夫人は多く感じた。鏡の影ほどの確かさで心は常にあなたから離れないだろうと言った、恋しい人の面影はその言葉のとおりに目から離れなくても、現実のことでないことは何にもならなかつた。源氏がそこから出入りした戸口、よりかかつていることの多かつた柱も見ては胸が悲しみでふさがる夫人であつた。今の悲しみの量を過去の幾つの事に比べてみることでできたりする年配の人であつても、こんなことは堪えられないに違いないのを、だれよりも睦まじく暮らして、ある時は父にも母にもなつて愛撫あいぶされた保護者で良人おつとだつた人

にわかに引き離されて女王が源氏を恋しく思うのはもつともである。死んだ人であれば悲しい中にも、時間があきらめを教えるのであるが、これは遠い十万億土ではないが、いつ帰るとも定めて思えない別れをしているのであるのを夫人はつらく思うのである。

入道の宮も東宮のために源氏が逆境に沈んでいることを悲しんでおいでになつた。そのほか源氏との宿命の深さから思つても宮のお歎なげきは、複雑なものであるに違いない。これまではただ世間が恐ろしくて、少しの憐みあわれを見せれば、源氏はそれによつて身も世も忘れて行爲に出ることが想像されて、動く心もおさえる一方にして、御自身の心までも無視して冷淡な態度を取り続けられたことによつて、うるさい世間であるにもかかわらず何の噂うわさ

も立たないで済んだのである。源氏の恋にも御自身の内の感情にも成長を与えなかったのは、ただ自分の苦しい努力があつたからであると思^{おぼしめ}召される宮が、尼におなりになって、源氏が対象とすべくもない解放された境地から源氏を悲しくも恋しくも今は思召されるのであつた。お返事も以前のものに比べて情味があつた。

このごろはいっそう、

しほたることをやくにて松島に年経^ふるあまもなげきをぞ積む

というのであつた。尚^{ないしのかみ}侍のは、

浦にたくあまたにつつむ恋なれば燻^{くゆ}る煙よ行く方^{かた}ぞなき

今さら申し上げるまでもないことを略します。

という短いので、中納言の君は悲しんでいる尚侍の哀れな状態を報じて来た。身にしむ^{ふしむ}節々もあつて源氏は涙がこぼれた。紫の女王のは特別にこまやかな情のこめられた源氏

の手紙の返事であつたから、身にしむことも多く書かれてあつた。

浦人の塩汲^くむ袖^{そで}にくらべ見よ波路隔つる夜の衣を

という夫人から、使いに託してよこした夜着や衣服類に洗練された趣味のよさが見えた。源氏はどんなことにもすぐれた女になつた女王がうれしかった。青春時代の恋愛も清算して、この人と静かに生を楽しもうとする時になつていたものと思うと、源氏は運命が恨めしかった。夜も昼も女王の面影を思うことになつて、堪えられぬほど恋しい源氏は、やはり若紫は須磨へ迎えようという氣になつた。左大臣からの返書には若君のことがいろいろと書かれてあつて、それによつてまた平生以上に子と別れている親の情は動くのであるが、頼もしい祖父母たちがついていられるのであるから、氣がかりに思う必要はないとすぐに考えられて、子の闇^{やみ}という言葉も、愛妻を思う煩^{ぼんのう}悩の闇に比べて薄いものらしくこの人には見えた。

源氏が須磨へ移つた初めの記事の中に筆者は書き洩^もらしてしまつたが伊勢^{いせ}の御息所^{みやすどころ}のほうへも源氏は使いを出したのであつた。あちらからもまたはるばると文^{ふみ}を持つて使いが

よこされた。熱情的に書かれた手紙で、典雅な筆つきと見えた。

どうしましても現実のことと思われませんような御隠^{いんせい}栖^{せい}のことを承りました。あるいはこれもまだ私の暗い心から、夜の夢の続きを見ているのかもしれない。なお幾年もそうした運命の中にあなたがお置かれになることはおそろくなかうと思われず。それを考えますと、罪の深い私は何時をはてともなくこの海の国にさすらえていなければならぬことかと思われず。

うきめかる伊勢をの海人^{あま}を思ひやれもしほ垂^たるてふ須磨の浦にて

世の中はどうなるのでしょう。不安な思いばかりがいたされます。

伊勢島や潮干^{しほひ}のかたにあさりても言ふかひなきはわが身なりけり

などという長いものである。源氏の手紙に衝動を受けた御息所はあとへあとと書き続^ついで、白い支那^{しな}の紙四、五枚を巻き続けてあった。書風も美しかった。愛していた人であ

つたが、その人の過失的な行為を、同情の欠けた心で見ても恨んだりしたことからは、御息所も恋をなげうって遠い国へ行ってしまったのであると思うと、源氏は今も心苦しくて、済まない目にあわせた人として御息所を思っているのである。そんな所へ情のある手紙が来たのであったから、使いまでも恋人のゆかりの親しい者に思われて、二、三日滞留させて伊勢の話を侍臣たちに問わせたりした。若やかな気持ちのよい侍であった。閑居のことであるから、そんな人もやや近い所でほのかに源氏の風貌ふうぼうに接することもあつて侍は喜びの涙を流していた。伊勢の消息に感動した源氏の書く返事の内容は想像されないこともない。

こうした運命に出逢う日を予知していましたなら、どこよりも私はあなたとごいつしよの旅に出してしまうべきだったなどと、つれづれさから癖になりました物思いの中にはそれがよく思われます。心細いのです。

伊勢人の波の上漕こぐ小船せうねにもうきめは刈らで乗らましものを
あまがつむ歎なげきの中にしほたれて何時いつまで須磨の浦うらに眺ながめん

いつ口ずからお話ができるであろうと思つては毎日同じように悲しんでおります。

というのである。こんなふうに、どの人へも相手の心の慰むに足るような愛情を書き送つては返事を得る喜びにまた自身を慰めている源氏であつた。花散里はなちるさとも悲しい心を書き送つて来た。どれにも個性が見えて、恋人の手紙は源氏を慰めぬものもないが、また物思いの催たねされる種ともなるのである。

荒れまざる軒のしのぶを眺めつつしげ繁くも露のかかる袖かな

と歌つている花散里は、高くなつたという雑草のほかに後うしろみ見をする者のない身の上なのであると源氏は思いやつて、長雨に土塀どべいがところどころ崩くずれたことも書いてあつたために、京の家司けいしへ命じてやつて、近国にある領地から人夫を呼ばせて花散里やしきの邸の修理をさせた。

尚ないしのかみ侍は源氏の追放された直接の原因になつた女性であるから、世間からは嘲ちやうしやう笑わら的に注視され、恋人には遠く離れて、深い歎なげきの中に溺おほれているのを、大臣は最も愛している娘であつたから憐あわれに思つて、熱心に太后へ取りなしをしたし、帝みかどへもお詫わびを申し

上げたので、尚侍は公式の女官長であつて、燕寝^{えんしん}に侍する女御^{にょご}、更衣^{こうい}が起こした問題ではないから、過失として勅免があればそれでよいことになった。帝の御愛^{あい}寵^{ちよう}を裏切つて情人を持つた点をお憎みになつたのであるが、赦免の宣旨^{せんじ}が出て宮中へまははいることになつても、尚侍の心は源氏の恋しさに満たされていた。七月になつてその事が実現された。非常なお氣に入りであつたのであるから、人の譏^{そし}りも思^{おも}召^{おぼしめ}さずに、お常御殿の宿直所^{とのいどころ}にばかり尚侍は置かれていた。お恨みになつたり、永久に変わらぬ愛の誓いを仰せられたりする帝の御風采^{ふうさい}はごりつぱで、優美な方なのであるが、これを飽き足らぬものとは自覺していないが、なお尚侍には源氏ばかりが恋しいというのほもつたいない次第である。音楽の合奏を侍臣たちにさせておいでになる時に、帝は尚侍へ、

「あの人がいないことは寂しいことだ。私でもそう思うのだから、ほかにはもつと痛切にそう思われる人があるだろう。何の上にも光というものがなくなった気がする」と仰せられるのであつた。それからまた、

「院の御遺言にそむいてしまった。私は死んだあとで罰せられるに違いない」と涙ぐみながらお言いになるのを聞いて、尚侍は泣かずにいられなかった。

「人生はつまらないものだという氣がしてきて、それとともにもう決して長くは生きてい

られないように思われる。私がなくなってしまった時、あなたは どう思いますか、旅へ人の行った時の別れ以上に悲しんでくれないでは私は失望する。生きている限り愛し合おうという約束をして満足している人たちに、私のあなたを思う愛の深さはわからないだろう。私は来世に行つてまであなたと愛し合いたいのだ」

となつかしい調子で仰せられる、それにはお心の底からあふれるような愛が示されていることであつたから、尚侍の涙はほろほろとこぼれた。

「そら、涙が落ちる、どちらのために」

と帝はお言いになつた。

「今まで私に男の子の不在なのが寂しい。東宮を院のお言葉どおりに自分の子のように私は考えているのだが、いろいろな人間が間にいて、私の愛が徹底しないから心苦しくてならない」

などとお語りになる。御意志によらない政治を行なう者があつて、それを若いお心の弱さはどうなされようもなく御煩悶はんもんが絶えないらしい。

秋風が須磨の里を吹くころになつた。海は少し遠いのであるが、須磨の関も越えるほど秋の波が立つと行平ゆきひらが歌つた波の音が、夜はことに高く響いてきて、堪えがたく寂し

いものは謫居たつきよの秋であつた。居間に近く宿直とくのいしている少数の者も皆眠っていて、一人の源氏だけがさめて一つ家の四方の風の音を聞いていると、すぐ近くにまで波が押し寄せて来るように思われた。落ちるともない涙にいつか枕まくらは流されるほどになっている。琴きんを少しばかり弾ひいてみたが、自身ながらもすぐ聞こえるので、弾きさして、

恋ひわびて泣く音に紛まがふ浦波は思ふ方より風や吹くらん

と歌っていた。惟光これみつたちは悽慘せいさんなこの歌声に目をさましてから、いつか起き上がった。訳もなくすすり泣きの声を立てていた。その人たちの心を源氏が思いやるのも悲しかった。自分一人のために、親兄弟も愛人もあつて離れがたい故郷に別れて漂泊の人に彼らはなっているのであると思うと、自分の深い物思いに落ちたりしていることは、その上彼らを心細がらせることであろうと源氏は思つて、昼間は皆といつしよに戯談じやうだんを言つて旅愁を紛らそうとしたり、いろいろの紙を継がせて手習いをしたり、珍しい支那しなの綾あやなどに絵を描かいたりした。その絵を屏風びやうぶに貼はらせてみると非常におもしろかった。源氏は京にいたころ、風景を描くのに人の話した海陸の好風景を想像して描いたが、写生のできる今

日になつて描かれる絵は生き生きとした生命いのちがあつて傑作が多かつた。

「現在での大家だといわれる千枝ちえだとか、常則つねのりとかいう連中を呼び寄せて、ここを密画に描かせたい」

とも人々は言つていた。美しい源氏と暮らしていることを無上の幸福に思つて、四、五人はいつも離れずに付き添つていた。庭の秋草の花のいろいろに咲き乱れた夕方に、海に見える廊のほうへ出てながめている源氏の美しさは、あたりの物が皆素描あらがきの画えのような寂しい物であるだけいっそう目に立つて、この世界のものとは思えないのである。柔らかな白い綾あやに薄紫を重ねて、藍あいがかつた直衣のうしを、帯もゆるくおおように締めた姿で立ち「釈迦しやく牟尼むに兄弟子」と名のつて経文を暗誦そらよみしている声もきわめて優雅に聞こえた。幾つかの船が唄うた声こゑを立てながら沖のほうを漕こぎまわつていた。形はほのかで鳥が浮いているほどにしか見えぬ船で心細い気がするのであつた。上を通る一列の雁かりの聲が楫かじの音によく似ていた。涙を払う源氏の手の色が、掛けた黒木の数珠じゆずに引き立って見える美しさは、故郷ふるさとの女恋しくなつてゐる青年たちの心を十分に緩和させる力があつた。

初雁はつかりは恋しき人のつらなれや旅の空飛ぶ声の悲しき

と源氏が言う。良清、

かきつらね昔のことぞ思ほゆる雁はそのよの友ならねども

民部大輔惟光、

心から常世を捨てて鳴く雁を雲のよそにも思ひけるかな

前右近丞が、

「常世出でて旅の空なるかりがねも列に後れぬほどぞ慰む

仲間がなかつたらどんなだろうと思います」

と言った。常陸介になつた親の任地へも行かずに彼はこちらへ来ているのである。煩

悶もんはしているであろうが、いつもはなやかな誇りを見せて、屈託なくふるまう青年である。明るい月が出て、今日が中秋の十五夜であることに源氏は気がついた。宮廷の音楽が思いやられて、どこでもこの月をながめているであろうと思うと、月の顔ばかりが見られるのであった。「にせんりぐわいこじんのこころ二千里外故人心」と源氏は吟じた。青年たちは例のように涙を流して聞いているのである。

この月を入道の宮が「霧や隔つる」とお言いになった去年の秋が恋しく、それからそれへといろいろな場合の初恋人への思い出に心が動いて、しまいには声を立てて源氏は泣いた。

「もうよほど更ふけました」

と言う者があつても源氏は寢室へはいろいろとしない。

見るほどぞしばし慰むめぐり合はん月の都ははるかなれども

その去年の同じ夜に、なつかしい御調子で昔の話をいろいろあそばすふうが院によく似ておいでになった帝も源氏は恋しく思い出していた。「おんしのぎよいいまここにあり恩賜御衣今在此」と口ずさ

みなながら源氏は居間へはいった。恩賜の御衣もそこにあるのである。

憂^うしとのみひとへに物は思ほえて左右にも濡^ぬるる袖^{そで}かな

とも歌われた。

このころに九州の長官の大^{だいに}式が上つて来た。大きな勢力を持つていて一門郎党の数が多く、また娘たくさんな大式でもあつたから、婦人たちにだけ船の旅をさせた。そして所々で陸を行く男たちと海の一行とが合流して名所の見物をしながら来たのであるが、どこよりも風景の明媚^{めいび}な須磨の浦に源氏の大將が隠^{いんせい}栖していられるということを聞いて、若いお洒落^{しゃれ}な年ごろの娘たちは、だれも見ぬ船の中にいながら身なりを気に病んだりした。若その中に源氏の情人であつた五^ご節^{せち}の君は、須磨に上陸ができるのでもなくて哀愁の情に堪えられないものがあつた。源氏の弾^ひく琴の音^ねが浦風の中に混じつてほのかに聞こえて来た時、この寂しい海べと薄^{はつ}倅^こな貴人とを考え合せて、人並みの感情を持つ者は皆泣いた。大式は源氏へ挨拶^{あいさつ}をした。

「はるかな田舎^{いなか}から上つてまいりました私は、京へ着けばまず伺候いたしましたして、あなた

様から都のお話を伺わせていただきますことを空想したものでございました。意外な政變のために御隠栖いんせいになつております土地を今日通つてまいります。非常にもつたいないことと存じ、悲しいことと思うのでございます。親戚と知人とがもう京からこの辺へ迎えにまいつておりまして、それらの者がうるそうございますから、お目にかかりに出ないのでございますが、またそのうち別に伺わせていただきます」

というのであつて、子の筑前守ちくぜんのかみが使いに行つたのである。源氏が蔵人くらうどに推薦して引き立てた男であつたから、心中に悲しみながらも人目をはばかつてすぐに帰ろうとしていた。

「京を出てからは昔懇意にした人たちともなかなか逢あえないことになつていたのに、わがわが訪ねて来てくれたことを満足に思う」

と源氏は言つた。大貳への返答もまたそんなものであつた。筑前守は泣く泣く歸つて、源氏の住居すまいの様子などを報告すると、大貳をはじめとして、京から来ていた迎えの人たちもいっしょに泣いた。五節ごせちの君は人に隠れて源氏へ手紙を送つた。

琴の音にひきとめらるる綱手つなてなは縄なはたゆたふ心君知るらめや

音楽の横好きをお笑いださいますな。

と書かれてあるのを、源氏は微笑しながらながめていた。若い娘のきまり悪そうなどころのよく出ている手紙である。

心ありてひくての綱のたゆたはば打ち過ぎましや須磨の浦波

漁村の海人あまになつてしまふとは思わなかつたことです。

これは源氏の書いた返事である。明石あかしの駅長に詩を残した菅公のように源氏が思われて、五節は親兄弟に別れてもここに残りたいと思うほど同情した。

京では月日のたつにしたがつて光源氏のない寂せきりよう寥を多く感じた。陛下もそのお一人であつた。まして東宮は常に源氏を恋しく思召おぼしめして、人の見ぬ時には泣いておいでになるのを、乳母めのとたちは哀れに拝見していた。王命婦おうみよふはその中でもことに複雑な御同情をしているのである。入道の宮は東宮の御地位に動揺をきたすようなことのないかが常に御不安であつた。源氏までも失脚してしまつた今日では、ただただ心細くのみ思つておいでに

なつた。源氏の御弟の宮たちそのほか親しかった高官たちは初めてのころしきりに源氏と文通をしたものである。人の身にしむ詩歌が取りかわされて、それらの源氏の作が世上にほめられることは非常に太后のお気に召さないことであつた。

「勅勘を受けた人というのは、自由に普通の人らしく生活することができないものなのだ。風流な家に住んで現代を誹謗ひぼうして鹿を馬しかだと言おうとする人間に阿おもる者がある」

とお言いになつて、報復の手の伸びて来ることを迷惑に思う人たちは警戒して、もう消息を近來しなくなつた。二条の院の姫君は時がたてばたつほど、悲しむ度も深くなつていった。東の対にいた女房もこちらへ移された初めは、自尊心の多い彼女たちであるから、たいしたことなくて、ただ源氏が特別に心を惹ひかれてゐるだけの女性であろうと女王を考へていたが、馴なれてきて夫人のなつかしく美しい容姿に、誠実な性格に、暖かい思いやりのある人扱いに敬服して、だれ一人暇いとまを乞う者もない。良い家から來てゐる人たちには夫人も顔を合わせてゐた。だれよりも源氏が愛してゐる理由がわかつたように彼女たちは思うのであつた。

須磨のほうでは紫の女王によおうとの別居生活がこのまま続いて行くことは堪えうることでないと源氏は思つてゐるのであるが、自分でさえ何たる宿命でこうした生活をするのかと情

けない家に、花のような姫君を迎えるという事はあまりに思いやりのないことであるとまた思い返されもするのである。下男や農民に何かと人の小言こごを言う事なども居間に近い所で行なわれる時、あまりにもつたいたいことであると源氏自身で自身を思うことさえもあった。近所で時々煙の立つのを、これが海人あまの塩を焼く煙なのであらうと源氏は長い間思っていたが、それは山莊の後ろの山で柴しばを燻くべている煙であつた。これを聞いた時の作、

山がつの庵いほりに焚たけるしばしばも言問ひ来なむ恋ふる里人

冬になつて雪の降り荒れる日に灰色の空をながめながら源氏は琴を弾ひいていた。良清よしきよに歌を歌わせて、惟光これみつには笛の役を命じた。細かい手を熱心に源氏が弾き出したので、他の二人は命ぜられたことをやめて琴の音に涙を流していた。漢帝が北夷ほくゐの国へおつかわしになつた宮女の琵琶びわを弾いてみずから慰めていた時の心持ちはましてどんなに悲しいものであつたであらう、それが現在のことで、自分の愛人などをそうして遠くへやるとしたら、とそんなことを源氏は想像したが、やがてそれが真実のこのように思われて来て、悲しくなつた。源氏は「胡角こかく一声霜後夢いっせいそうごのゆめ」と王昭君おうしやうくんを歌つた詩の句が口に上つた。

月光が明るくて、狭い家は奥の隅々まで頭わに見えた。深夜の空が縁側の上にあつた。もう落ちるのに近い月がすごいほど白いのを見て、「唯是西行不左遷」と源氏は歌つた。

何方の雲路にわれも迷ひなん月の見るらんことも恥かし

とも言つた。例のように源氏は終夜眠れなかつた。明け方に千鳥が身にしむ声で鳴いた。

友千鳥諸声に鳴く曉は一人寢覚めの床も頼もし

だれもまだ起きた影がないので、源氏は何度もこの歌を繰り返して唱えていた。まだ暗い間に手水を済ませて念誦をしていることが侍臣たちに新鮮な印象を与えた。この源氏から離れて行く気が起こらないで、仮に京の家へ出かけようとする者もない。

明石の浦は這つてでも行けるほどの近さであつたから、良清朝臣は明石の入道の娘を思い出して手紙を書いて送つたりしたが返書は来なかつた。父親の入道から相談したいこ

とがあるからちよつと逢いに来てほしいと言つて来た。求婚に応じてくれないことのわかつた家を訪問して、失望した顔でそこを出て来る恰好は馬鹿に見えるだろうと、良清は悪いほうへ解釈して行こうとしない。すばらしく自尊心は強くても、現在の国の長官の一族以外にはだれにも尊敬を払わない地方人の心理を知らない入道は、娘への求婚者を皆門外に追い払う態度を取り続けていたが、源氏が須磨に隠栖をしてゐることを聞いて妻に言つた。

「桐壺の更衣のお生みした光源氏の君が勅勘で須磨に来ていられるのだ。私の娘の運命についてある暗示を受けているのだから、どうかしてこの機会に源氏の君に娘を差し上げたいと思う」

「それはたいへんまちがつたお考えですよ。あの方はりっぱな奥様を何人も持つていらつして、その上陛下の御愛人をお盗みになつたことが問題になつて失脚をなすつたのでしよう。そんな方が田舎育ちの娘などを眼中にお置きになるものですか」

と妻は言つた。入道は腹を立てて、

「あなたに口を出させないよ。私には考えがあるのだ。結婚の用意をしておきなさい。機会を作つて明石へ源氏の君をお迎えするから」

と勝手ほうだいなことを言うのにも、風変わりな性格がうかがわれた。娘のためにはまぶしい気がするほどの華奢かしやな設備のされてある入道の家であった。

「なぜそうしなければならいのでしょうか。どんなにぎりっぱな方でも娘のはじめての結婚に罪があつて流されて来ていらつしやる方を婿にしようなどと、私はそんな気がしません。それも愛してくださればよろしゅうございますが、そんなことは想像もされない。戯談ようだんにでもそんなことはおつしやらないでください」

と妻が言うと、入道はくやしがつて、何か口の中でぶつぶつ言っていた。

「罪に問われることは、支那しなでもここでも源氏の君のようなすぐれた天才的な方には必ずある災厄なのだ、源氏の君は何だと思う、私の叔父おじだった按察使大納言の娘が母君なのだ。すぐれた女性で、宮仕えに出すと帝王の恩寵おんちゆうが一人に集まつて、それで人の嫉妬しつとを多く受けて亡なくなられたが、源氏の君が残つておいでになるということは結構なことだ。女という者は皆桐壺きりつぼの更衣こういになろうとすべきだ。私が地方に土着した田舎者だといつても、その古い縁故でお近づきは許してくださるだろう」

などと入道は言っていた。この娘はすぐれた容貌ようぼうを持っているのではないが、優雅な上品な女で、見識の備わっている点などは貴族の娘にも劣らなかつた。境遇をみずから知

つて、上流の男は自分を眼中にも置かないであろうし、それかといって身分相当な男とは結婚をしようと思わない、長く生きていることになって両親に死に別れたら尼にでも自分
はなろう、海へ身を投げてもいいという信念を持っていた。入道は大事がつて年に二度ず
つ娘を住吉すみよしの社やしろへ参詣さんけいさせて、神の恩恵を人知れず頼みにしていた。

須磨は日ながの永い春になってつれづれを覚える時間が多くなった上に、去年植えた若木の
桜の花が咲き始めたのにも、霞かすんだ空の色にも京が思い出されて、源氏の泣く日が多かつ
た。二月二十幾日である、去年京を出た時に心苦しかった人たちの様子がしきりに知りた
くなった。また院の御代みよの最後の桜花の宴の日の父帝、艶えんな東宮時代の御兄陛下のお姿が
思われ、源氏の詩をお吟じになったことも恋しく思い出された。

いつとなく大宮人おほみやびとの恋しきに桜かざしし今日も来にけり

と源氏は歌った。

源氏が日を暮らし侘わびているころ、須磨の謫居たつきよへ左大臣家の三位中将さんみが訪ねて来た。
現在は参議になつていて、名門の公子でりっぱな人物であるから世間から信頼されている

ことも格別なのであるが、その人自身は今の社会の空氣が氣に入らないで、何かのおりごと源氏が恋しくなるあまりに、そのことで罰を受けても自分は悔やまないと決心してにわか源氏と逢うために京を出て來たのである。親しい友人であつて、しかも長く相見るときを得なかつた二人はたまたま得た会合の最初にまず泣いた。宰相は源氏の山莊が非常に唐風であることに氣がついた。絵のような風光の中に、竹を編んだ垣がめぐらされ、石の階段、松の黒木の柱などの用いられてあるのがおもしろかつた。源氏は黄ばんだ薄紅の服の上に、青みのある灰色の狩衣指貫の質素な装いでいた。わざわざ都風を避けた服装もいつそう源氏を美しく引き立てて見せる氣がされた。室内の用具も簡単な物ばかりで、起臥する部屋も客の座から残らず見えるのである。碁盤、双六の盤、彈棊の具なども田舎風のそまつにできた物が置かれてあつた。数珠などがさつきまで仏勤めがされていたらしく出ていた。客の饗応に出された膳部にもおもしろい地方色が見えた。漁から歸つた海人たちが貝などを届けに寄つたので、源氏は客という座敷の前へその人々を呼んでみることにした。漁村の生活について質問をすると、彼らは經濟的に苦しい世渡りをこぼした。小鳥のように多弁にさえざる話も根本になつてゐることは処世難である、われわれも同じことであると貴公子たちは憐んでいた。それぞれに衣服などを与えられた海人たちは

生まれてはじめての生きがいを感じたらしかった。山莊の馬を幾疋も並べて、それもここから見える倉とか納屋とかいう物から取り出す稲を食わせていたりするのが源氏にも客にも珍しかった。催馬樂さいばらの飛鳥井あすかいを二人で歌つてから、源氏の不在中の京の話を泣きもし、笑いもしながら、宰相はしだした。若君が何事のあるとも知らずに無邪氣でいることが哀れでならないと大臣が始終歎なげいているという話のされた時、源氏は悲しみに堪えないふうであつた。二人の会話を書き尽くすことはとうていできないことであるから省略する。

終夜眠らずに語つて、そして二人で詩も作つた。政府の威厳を無視したとはいふものの、宰相も事は好まないふうで、翌朝はもう別れて行く人になつた。好意がかえつてあとの物思ちいを作らせると言つてもよい。杯を手にしながらか
「酔よひのかなしみのみだをそそぐはるのさかづきのう
悲 泪 灑 春 杯 裏
ち
」と二人がいっしょに歌つた。供をして来ている者も皆涙を流していた。双方の家司たちの間に惜しまれる別れもあるのである。朝ぼらけの空を行く雁かりの列があつた。源氏は、

故郷ふるさとを何れいづの春か行きて見ん羨うらやましきは帰るかりがね

と言つた。宰相は出て行く気がしないで、

飽かなくに雁の常世とこよを立ち別れ花の都に道やまどはん

と言つて悲しんでいた。宰相は京から携えて来た心をこめた土産みやげを源氏に贈った。源氏からはかたじけない客を送らせるためにと言つて、黒馬を贈った。

「妙なものを差し上げるようですが、ここの風の吹いた時に、あなたのそばで嘶いくように思うからですよ」

と言つた。珍しいほどすぐれた馬であつた。

「これは形見だと思つていただきたい」

宰相も名高い品になつている笛を一つ置いて行つた。人目に立つて問題になるようなことは双方でしなかつたのである。上つて来た日に帰りを急ぎ立てられる気がして、宰相は顧みばかりしながら座を立てて行くのを、見送るために続いて立つた源氏は悲しそふであつた。

「いつまたお逢いすることができるとしよう。このまま無限にあなたが捨て置かれるようなことはありません」

と宰相は言つた。

「雲近く飛びかふ鶴たうも空に見よわれは春日の曇りなき身ぞ

みずからやましいと思うことはないのですが、一度こうなつては、昔のりっぱな人でももう一度世に出た例は少ないのですから、私は都というものをぜひまた見たいとも願つていませんよ」

こう源氏は答えて言うのであつた。

「たづかなき雲井に独りひと音をぞ鳴くね翅並べし友を恋ひつつつばさ

失礼なまでお親しくさせていただいたころのことをもつたいないことだと後悔される事が多いのですよ」

と宰相は言いつつ去つた。

友情がしばらく慰めたあとの源氏はまた寂しい人になつた。

今年は三月の一日に日みの日があつた。

「今日です、お試みなさいませ。不幸な目にあっている者が御禊みそぎをすれば必ず効果があるといわれる日でございます」

賢がつて言う者があるので、海の近くへまた一度行つてみたいと思つてもいた源氏は家を出た。ほんの幕のような物を引きまわして仮の御禊場みそぎばを作り、旅の陰陽師おんみょうじを雇つて源氏は禊はらいをさせた。船にやや大きい禊はらいの人形を乗せて流すのを見ても、源氏はこれに似た自身のみじめさをもつた。

知らざりし大海の原に流れ来て一方にやは物は悲しき

と歌いながら沙しゃ上じょうの座に着く源氏は、こうした明るい所ではまして水ぎわだつて見えた。少し霞かすんだ空と同じ色をした海がうらうらと風なぎ渡つていた。果てもない天地をながめていて、源氏は過去未来のことがいろいろと思われた。

八百やほよろづ神も憐あはれと思ふらん犯せる罪のそれとなければ

と源氏が歌い終わつた時に、風が吹き出して空が暗くなってきた。御禊みそぎの式もまだまつたく終わつていなかったが人々は立ち騒いだ。肱笠ひじがさ雨というものらしくにわか雨が降ってきてこの上もなくあわただしい。一行は浜べから引き上げようとするのであつたが笠を取り寄せる間もない。そんな用意などは初めからされてなかつた上に、海の風は何も何も吹き散らす。夢中で家のほうへ走り出すところに、海のほうは蒲団ふとんを拵ひろうげたように腫ふくれながら光つていて、雷鳴と電光が襲うてきた。すぐ上に落ちて来る恐れも感じながら人々はやつと家に着いた。

「こんなことにあつたことはない。風の吹くことはあつても、前から予告的に天氣が悪くなるものであるが、こんなににわかにも暴風雨になるとは」

こんなことを言いながら山莊の人々はこの天候を恐ろしがつていたが雷鳴もなおやまないう。雨の脚あしの当たる所はどんな所も突き破られるような強雨ごううが降るのである。こうして世界が滅亡するのかと皆が心細がつている時に、源氏は静かに経を読んでゐた。日が暮れるころから雷は少し遠ざかつたが、風は夜も吹いていた。神仙あらしへ人々が大願を多く立てたその力の顕あらわれがこれであろう。

「もう少し暴風雨が続いたら、浪に引かれて海へ行ってしまうに違いない。海嘯つなみというものはにわかにか起こって人死ひとしにがあるものだ」と聞いていたが、今日のは雨風が原因になっていてそれとも違うようだ」

などと人々は語っていた。夜の明け方になって皆が寝てしまったころ、源氏は少しうとうとしたかと思うと、人間でない姿の者が来て、

「なぜ王様が召していらつしやるのにあちらへ来ないのか」

と言いながら、源氏を求めるようにしてその辺を歩きまわる夢を見た。さめた時に源氏は驚きながら、それではあの暴風雨も海の竜王りゅうおうが美しい人間に心を惹ひかれて自分に見入しわざつての仕業であつたと気がついてみると、恐ろしくてこの家にいることが堪えられなくなつた。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所（<http://www.genji.co.jp/>）で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：砂場清隆

2003年7月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

須磨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>